

エビ種苗を集める女性

ミザヌール・ラフマン (バングラデシュ)

バングラデシュでは古くから農村部の女性は主婦として働きます。料理、子育て、高齢者の世話をし、さらには料理用のまき、牛フン、台所で使う藁を集め、池から飲み水を汲み、鳥などの家畜の世話をします。しかしながら、農業水田で海水を使った商業用のエビの養殖を始めるようになってから、女性や少女の運命は、経済的な観点からすると、いくぶん明るくなりました。「スンドルバン」というマングローブの森から流れる川で、女性たちはエビ種苗、すなわち稚エビを集めるようになったのです。エビの養殖を振興させる役割を担うようになった彼女たちは、泥だらけの養殖場の雑草の除去や稚エビの販売にも従事しています。これにより、社会経済的には、女性は国際的なエビの輸出による外貨獲得を促進する存在となったのです。今では、家庭やコミュニティーにおいて、女性は経済要素の1つとみなされています。女性であっても、潮の干満を利用して1日で少なくとも3ドルから10ドルは稼ぐことができます。ベビーブーム世代の貧しい女性が、今では外貨を稼いでおり、エビ産業の繁栄のおかげで、女性へのエンパワーメントが自然な流れで進んでいます。

1980年代の初め、海水を使ったエビの養殖が大クルナ地区周辺で開始されました。当時、エビ種苗、すなわち稚エビは川でしか捕れませんでした。主要な働きをしているのは女性や少女で、彼女達はエビ種苗を集めて、種苗の仲介業者やエビの養殖業者に販売します。当初は規模も小さいものでしたが、今では、インドの西ベンガルからミャンマーへと広がるベンガル湾の沿岸地帯における巨大産業へと成長しました。この産業はインドでも広がっています。



川でエビ種苗を集める女性

エビ産業に女性が関与しているという事実は、女性へのエンパワーメントが行われており、持続可能な形で、生活における女性の選択肢が提供されている、と理解すべきです。また、エビ種苗の捕獲、販売、生産の段階での養殖場の掃除、エビ加工産業の工場での労働など、女性はさまざまな活動にも関与しています。

エビの養殖に従事する女性たちは、今や、社会や家庭に新たに登場したグループとして、地方のコミュニティー、水産養殖、地方議会、政治の世界で発言力を持っています。海につながる川で彼女達が集めた稚エビが適正な価格で販売され、さらには、雑草の除去や、さまざまな種類のエビの等級付け、稚エビの測定、搬送といった重労働が正当に評価されるための枠組みの強化を目指し、共通のプラットフォームの下にこうした女性達を組織化する必要があります。また、これらの女性はエビ業界における真の草の根レベルの運動家であり、国

際的に利益を出すこの輸出産業を振興させるためにも、男性と同等の賃金、川での安全、ヘルスケア、リプロダクティブ・ヘルスのための設備などの獲得を目指し、ネットワークを構築すべきです。



集めたエビ種苗を数える女性たち

そこで、女性達の基本的な権利に焦点をあて、メディア、意見表明、ロビー活動、市民キャンペーンを活用した上で、どのようにしてそうした権利を獲得すべきなのか、考えなければなりません。平等な機会と設備は時代に求められているのです。

エビ産業に関わる女性や少女のためにも、各 NGO では早急に提携を結ぶ必要性を感じています。というのも、

彼女達は多くの危険が潜む川でエビ種苗を集めているからです。川には、サメ、ワニ、ヘビなどの動物、または潮汐流や波や嵐にさらわれる可能性、健康被害、溺死など、いつも危険がいつばいです。こうした女性のコミュニティーの存在と権利を守るために、女性のための強力な監視グループが必要です。

NGO の活動家は、政府、エビ輸出業者協会、国会議員(MP)、地元の組合協議会に対し、苦労を重ねて外貨を獲得している女性のために、基本的な人権を擁護すべきだと訴えています。市民も、エビ産業に関わる女性が、男性と同様の重労働に対し、しかるべき賃金を得ているかどうか、監視を行うよう国際労働機構(ILO)、欧州連合(EU)、世界銀行(World Bank)に求めています。

女性や少女は長時間にわたり重労働をこなしていますが、得るものは少なく、一方、エビの養殖業者や輸出業者は利益を上げて外貨を獲得しています。つまり、立役者である彼女たちのとり分は少ないのです。また、男性労働者より女性労働者の賃金は低くなっています。例えば、女性 の 1.5 ドルに対し、男性は 4 ドルです。地元市民の特派員として、女性の状況の改善を目指し、子どもの学校教育、稚エビ捕獲のための研修、ヘルスサポート、貧困にあえぎ社会の主流から取り残された女性に欠かせない食糧の権利といった問題に焦点をあてる必要があります。また、政府が取り組みを進めていくことが重要です。